

カルチュラル・スタディーズにおける〈文化〉概念

平 田 毅

〔抄録〕

この小論は、カルチュラル・スタディーズにおける文化概念について概観し、その可能性および問題点を批判的に検討しようとするものである。カルチュラル・スタディーズの潮流は、既存の学問（ディシプリン）の伝統的なあり方に対して異議申し立てをしているともいえる。これは、カルチュラル・スタディーズの〈文化〉の捉え方自体が、サブカルチャーや対抗文化へのコミットメントを通じて形成されてきたことに起因するといえる。このカルチュラル・スタディーズの文化概念をS. ホールの主張から「大文字の文化と小文字の文化」のせめぎ合う場としてとらえ、従来の社会学における文化理論の中にも位置付けて、その有効性を論じてみた。

キーワード：反ディシプリン、文化の政治学、「折衝」コード、大文字の文化と小文字の文化

はじめに

カルチュラル・スタディーズなるものが〈流行〉っているとされて久しい。“Cultural Studies”をそのまま邦訳すると「文化研究」であるが、この邦訳でいうところの「文化」研究という領域は、社会学、文化人類学といった従来の学問領域のなかで既になされてきたものともいえよう。その意味では、取りたてて新しい領域でも新しい対象を扱っているわけではないともいえる。確かに社会学、文化人類学をはじめ、その下位分野である大衆文化論、文化社会学といった研究領域においても「文化」の研究はなされてきた。

それでは、このカルチュラル・スタディーズという新しい潮流は、既存の学問領域とどこが異なっているのだろうか。

カルチュラル・スタディーズは、イギリスにその起源をもつ「学際的」な分野である。それはイギリスにおける現代文学・文化批評を起点としているが、その「正式の」起点は1964年にリ

チャード・ホガートが設立したバーミンガム大学現代文化研究センター（Birmingham Center for Contemporary Cultural Studies: CCCS）にあるとされる。その後、1968年にセンター長がスチュアート・ホールに代わり、それ以降、研究の焦点も社会科学の領域に徐々にシフトしていった。

日本へは、マス・コミュニケーション論・メディア研究の領域において、ホールの「エンコーディング／デコーディング」モデルがその端緒としてまず導入された。その後、1996年には『思想』や『現代思想』といった雑誌でも特集が生まれ、翻訳書のいくつかも出版されるほどに人文・社会科学に多大なインパクトを与えつづけているといえる。

しかし、カルチュラル・スタディーズは、それを伝統的学問（ディシプリン）の一つに変えることは不可能であり、またインター・ディシiplinaryな領域と規定することもできない。カルチュラル・スタディーズは反・ディシiplinaryな実践なのである。ホガートはカルチュラル・スタディーズは確固としたディシプリン上の基礎をもたないことを強調しているし、グレアム・ターナーは「カルチュラル・スタディーズは、少なくとも部分的にはディシプリンへの批判に動機づけられているため、その一つとなることを嫌ってきた⁽¹⁾」と書いている。

本論においては、次のような視点でそうしたカルチュラル・スタディーズとは何なのかを明らかにできればと考えている。

すなわち、カルチュラル・スタディーズという潮流の研究領域・方法とはどのようなものなのか、また、カルチュラル・スタディーズにおいて〈文化〉の概念はどのように定義されているのか、その定義づけの意味するところは何なのか、さらにはカルチュラル・スタディーズの抱える問題点はどこにあるのか、社会学（とりわけ文化社会学ないしは文化の社会学）の研究との接合は可能か、といった視点からカルチュラル・スタディーズなるものを批判的に検討できればと考えている。

1. カルチュラル・スタディーズの文化概念

（1）カルチュラル・スタディーズの起点と研究領域

カルチュラル・スタディーズとは、「現代的そして極めて同時代的な社会における文化の形態とプロセスを批判的に分析しようとするさまざまな地点からの研究の多様な総体である⁽²⁾」といえる。カルチュラル・スタディーズは「一つではない」といわれる。このことは、リチャード・ジョンソン（CCCSの前センター長）が、1983年の論文「What Is Cultural Studies Anyway?」のタイトルを「What are cultural studies anyway?」という複数形に変えて読むように改訂したことからも伺える⁽³⁾。

このカルチュラル・スタディーズのルーツは、リチャード・ホガートやレイモンド・ウィリアムズ⁽⁴⁾らのイギリスにおける左翼批評家の著作にあるとされる。しかし、カルチュラル・スタディーズが、その地歩を固めた「制度的」な起点は、1964年にホガートが設立したバーミンガ

ム大学現代文化研究センター(The Birmingham Center for Contemporary Cultural Studies)にある。当初は、現代文学批評・文化批評的色合いの濃かったセンターの傾向も、1968年からスチュアート・ホールが同センター長に就任して以降、社会科学の領域とのコミットメントの傾向を強めてくることになる。

そこで扱われた領域は、機関誌 *Working Papers in Cultural Studies* を中心に、ポピュラー文化における政治の研究、サブカルチャー理論、エンコーディング／デコーディング理論に基づくメディア研究、グラムシへの新たな関心、主体性、政治(学)、ジェンダー、欲望の概念の再考、人種、エスニシティ、ポストコロニアリズムの研究、エイズ・スタディーズと広範多岐にわたっている。

また、その方法論も、他の研究領域と区別される方法論を持たないとされ、有効な方法ならば何でも利用しようとするブリコラージュ(bricolage)のようなものとされる。よって、いかなる方法論も特権化されることはない。一時的にしろ、完全な安心と信頼で用いられることもなく、常に批判の対象とされる。しかし、いかなる方法であっても完全に否定されることもない。つまり、文学批評の方法であっても、エスノグラフィックな方法であっても、マルクス主義的方法であっても、テキスト分析的方法であっても、利用可能ならばどんな方法をも拒絶しないということである。スチュアート・ホールは、パーミングセンターでの中心的な目標は、「人々に何が起きているのかを理解できるようにすること、とりわけ、ものの考え方、生存のための戦略、抵抗のための資源を提供すること」だとしているように、カルチュラル・スタディーズの実践は、きわめてプラグマティックであり、戦略的であり、自己反省的なものであるといえよう。研究においていかなる方法が選択されるかは、問われている問題次第であり、その問題は、それがおかれている文脈次第なのである。⁽⁶⁾

(2) ウィリアムズの〈文化〉概念

その後のカルチュラル・スタディーズに多大な影響を与えたとされるレイモンド・ウィリアムズ(Raymond Williams)の文化概念を検討してみることはじめてみよう。ウィリアムズは、その著 *Keywords* において culture の語は「英語でもっとも複雑な二、三語のうちに入る」とし、culture という語彙の語源、先行語にはじまり、その使用例及び意味を入念に探究している。彼が明らかにしようとしていることは、この言葉の歴史には、文化の静態的かつエリート主義的な見方が含まれているだけでなく、文化をあらゆる象徴的活動をも包括する、より広い概念も含まれているということなのである。そこで彼は、文化というこの言葉の現代的な用法は、いくつか範疇に整理できるとして、次の三つのを提出している。

- (1) 知的、精神的、美的発展の一般的過程を表わす独立した抽象名詞で、18世紀からみられるもの。
- (2) 独立した名詞で、一般的に使われても、特殊な意味で使われても、ある国民や時代や

集団の特定の生活様式を示すもの。

(3) 知的、そしてとくに芸術的活動の作品や実践を表わす独立した抽象名詞。

つまり、(1)については、「農耕」から派生した「養育」「教養」の意を多く内包したカテゴリーであり、(2)は歴史的には cultures と複数形で文化が捉えられはじめた、ヘルダーおよび19世紀からみられるものである。そして、(3)のカテゴリーが、現在では多くの場合、もっとも普及している用法であるとしている。しかし、ウィリアムズは、cultureの現代的用法には上記三つの意味カテゴリーが輻輳的重層的に内包されているのであり、このうちのいずれかに意味を限定して文化をとらえる姿勢はとらない。

「この言葉のこの複雑な、そして依然として生きている歴史に直面した場合、一つの『真の true』、『適切な proper』あるいは『厳正な scientific』意味を選択して、ほかの意味を曖昧、または混乱しているとして放棄するような反応をするのはたやすい。こうした反応の証拠はクローバーとクラクホーンのすぐれた研究『文化 — 概念と定義に関する評解』にさえみられる。(中略)一つの学問の中で、概念の用法を明確にしなければならないことはわかりきっている。しかし、一般に、重要なのは意味の範囲での重複である。さまざまな意味の複合体は、一般的な人間の成長と特定の生活様式との関係、およびこの両者と芸術、知性の作品と実践との関係に関する複雑な議論を示している。この複雑な議論の中には、実際上は重複している立場と同時に、根本的に対立する立場もみられる。また、理解できることだが、多くの未解決の問題や混乱した解答もある。しかし、これらの議論や問題は、実際の用法の複雑性を減じることによって解決されない。(中略)…つまり、複雑性は最終的にはその言葉にあるのではなく、そのさまざまな用法がそれぞれの意義をこめて示している諸問題にあるということなのである」⁽⁷⁾

多少長い引用になったが、ここでウィリアムズが示唆していることは、「文化の概念は、私たちのふつうの生活条件の一般的で主要な変化に対する、一般的な反応である。その基本的な要素は、全体的な質的評価に向けられた企てである」⁽⁸⁾ということである。

こうした文化概念の複雑性に対する視点はその後のカルチュラル・スタディーズの文化の捉え方に重要な起点を与えることになったのである。文化を定義しようとする試みは、それぞれ必要から生まれたのであり、歴史的変化への対応から生まれたのである。

ウィリアムズは、イギリスおよびあらゆるカルチュラル・スタディーズの伝統を動機づけているものに幅広い起動力を与えたとされている。文化と社会の関係を同定し、分節化することが、そこでの中心課題とされる。

「文化」は象徴的および物質的領域に同時にはたらきかけるものであり、したがって文化の研究はその一方の領域を他方より優先するものではなく、その両者の関係を問いたただすものであり、文化とは「物質的、知的、精神的な生活のしかたの総て(a whole way of life)」⁽⁹⁾のことである。そこには共同体の日常生活の中での象徴的行為も含まれる。

このウィリアムズの視点には、社会学ならびに文化人類学など既存の学問的伝統が採用して

きた文化の捉え方に対する批判的観点が示されているといえよう。また、こうしたウィリアムズの観点を起点とするカルチュラル・スタディーズは、「文化」を中立的概念として捉えるのではなく、後述するように、「せめぎ合う場」として捉える「文化の政治学」へと発展させられていくことになる。

「文化」の語それ自体に与えられてきた多様な意味の歴史は、カルチュラル・スタディーズを構成する緊張をもたらしてきたといえる。

(3) トンプソンの文化概念の分類

ジョン・B・トンプソン(John B. Thompson)は、その著作『イデオロギーと現代文化』(1990)のなかで、文化理論における文化の概念規定のあり方をいわば発展史的に、「古典的」「記述的」「象徴的」「構造的」文化概念の四つに分類整理している。このうち「記述的」概念と「象徴的」概念はまとめて「人類学的」文化概念として包括できるとされている⁽¹⁰⁾。

まず「古典的」文化概念は、文化についての初期の議論に顕れてきたものであり、とりわけ18世紀から19世紀にかけてのドイツの哲学者や歴史家に見られるものだという。そこにおいては、文化とは、人間の知的・精神的の能力を發展させるプロセスを示すものであり、この「プロセス」とは「文明」とはある点で区別されるものとされる。また、そのプロセスは、主にヨーロッパ近代の進歩的性格に直結した芸術や文学などを吸収することにより達成されるとされる。この立場の代表はM. アーノルドであり、そこには、〈大衆的なもの〉から卓越したものとして〈洗練された教養〉を指定し、そこに文化的なるものをみようとする。つまり、〈真正な authenticなもの〉と〈真正でないもの〉を識別しようとする機制がそこにはあることとなる。

「人類学的」文化概念は、19世紀後半に人類学という専門分野が登場してくるに伴って顕れてきたものであり、そのうち、「記述的」文化概念は、特定の社会ないしは歴史段階に特有の価値・信念・慣習・しきたり・習慣・日常行動の特徴といった多様な配列に言及するタイラーの定義に代表されるような文化概念である⁽¹¹⁾。タイラーは文化を構成するこれらの諸要素を比較し、進化論に基づいて文化を歴史的発展段階に従って序列化している。マリノフスキーは『文化の科学的理論』(1958)において文化を進化論的に捉えることを否定し、現地調査に基づいて諸文化要素が機能的・有機的に関連していることを実証することを研究主題としたのであるが、こうした機能的な文化分析も記述的概念の範疇にはいる。

「象徴的」文化概念は、シンボリズムに関係したものとその焦点を移行する。すなわち、この概念によれば、文化現象はシンボリックな現象であり、文化の研究は本質的にシンボルとシンボリックな行為の解釈に関係していることになる。この「象徴的」概念は、ギアツに代表されるものであり、そこでは、文化とは「(ある特定社会において生活する)人間が作り上げた意味の体系」とされる。たとえば、腰を屈める身体的動作は、ある特定の「意味の体系」をとおして解釈されることにより「おじぎ」・「挨拶」となるとされる。トンプソンによれば、ギ

アツの文化概念の欠点は、シンボルとシンボリックな行為が埋め込まれている構造化された社会との関係に十分な注意を払っていないところにある。また、権力と社会の対立の問題にも無関心であると指摘する。つまり、象徴体系としての文化を社会・政治的コンテクストから切離し、(社会性を欠いた)意味の世界を構築してしまうという陥穽に陥っているというのである。社会学に代表的なパーソンズやシルズの文化の捉えも、この範疇に属する文化概念といえよう。そこでは、「文化」は社会内部であたかも平等に共有され、論理的には統合された意味体系としてイメージされているといえる。

一方、「構造的」文化概念においては、文化は象徴的形態ではあるが、つねに具体的に構造化された社会的コンテクストに埋め込まれているとされる。カルチュラル・スタディーズが展開してきた文化概念はこの「構造的」文化概念にあたるといえる。それは「文脈的」(contextual)な文化概念ともいえる。

次節においては、この「構造的」文化概念に相当するとされるカルチュラル・スタディーズにおける文化概念を、スチュアート・ホールに依拠しつつ見ていくことにする。

(4) スチュアート・ホールの文化概念

カルチュラル・スタディーズの文化概念を、単一のものに収斂させて論ずるのは、そもそも不可能に近いのであるが、ここではスチュアート・ホールの「エンコーディング／デコーディング」モデルを検討するなかで、彼の文化概念を紡ぎだし、その輪郭を概観してみよう⁽¹²⁾。

そもそもこのモデルは、テレビメッセージでの読解様式が、社会的な力作用によって多義性と緊張を孕んでいることを示すものである。つまり、マスコミュニケーションのプロセスは、直線的なメッセージの導管ではなく、位相の異なる複数の実践の接合によって維持される重層的な構造を形成しているといえる。このモデルは次のように把握できよう。

テレビの言説におけるメッセージ生産の場面では、同一対象が複数の仕方でもエンコードされることが可能なため、絶えず緊張を孕んだ課題性を持つこととなり、よってそのメッセージは複数の潜在的読み取りの可能性を含んだ多義的なものである。一方、受け手の側のデコード過程についても、メッセージとその意味との結びつきは、送り手の意図どおりの自然で透明なものではなく、対立的緊張を含んだ実践であることになる。

ここには、エンコードとデコードのギャップの存在の可能性が示されている。それは、このギャップは、単に送り手の意図と受け手の解釈とがズレていることを示しているだけでなく、社会的・文化的差異を背景とした意味付与の「コード」に根ざした構造的なものであることをも示しているといえる。

ホールはこの意味を付与するコード化のパターンを三つに分類して提出している。すなわち、①支配的コード(dominant code)、②対抗的コード(oppositional code)、③折衝的コード(negotiated code)、である。

支配的コードとは、ヘゲモニーに逆らわぬよう支配的な意味を優先的に付与するものであり、それに対して、対抗的コードは、反ヘゲモニーの構えが顕在化され全く異なった意味を付与するというものである。ここで、ホールの功績として大きいものは、第三の「折衝的コード」を提示したことである。「折衝」コードとは、優先的な解釈に対して一方で「抵抗性」を、他方で「適合性」を「特殊状況的論理」によって使い分けるというもので、われわれの日常における意味付与实践とは、常にすべてヘゲモニーとの「折衝」的实践であるとされる。つまり、記号と意味は必然的に照応するものではなく、その関係は常にズレと差異の可能性が内包されていることとなる。そこには、「誤解=誤認(mis-recognition)」の可能性が、潜むことともなる。この特定の意味の可能域に対する合意を獲得しようとする実践間の「折衝」をホールは、「意味付与の政治学(politics of signification)」とよんだ。⁽¹³⁾

小笠原博毅によれば、この「意味付与の政治学」と文化の理論的關係は明白であるという。すなわち、優先的で妥当な意味の表象としての「常識」は、大文字の文化(Culture)として表象される諸実践/諸過程の内部に、「不在」の諸文化(大文字の文化にとっての他者性)を自らへの接近可能性に基づいて階層化する。つまり、常に既存の文化の中で「経験」しなければならぬ諸個人は、大文字の文化との示差的な距離を基準にして自己の位置性を「経験」する。ホールのいう「経験」とは、その生成原理が主体に還元されるものではなく、イデオロギーによって文化の可能域が展開されるような場を意味するのであり、よって、イデオロギーは、「経験」を主体にとって「意味あるもの」として編成し、文化に主体を配置する(locate) — アイデンティティ位置を取らせる — ために不可欠なものとして機能する。⁽¹⁴⁾

したがって、支配文化に反抗するという対抗文化(counter culture)の実践は、「常識」を距離化することを意味することとなる。しかし距離をとればとるほど支配文化のヘゲモニーは侵食されず、「優先的な意味」が保持され、ある種の支配的言説が再生産されるという皮肉な結果を招いてしまう。こうした例は、バーミングハムセンター機関誌『Working Papers in Cultural Studies No. 7/8』(1975)および、ウィリスの『ハマータウンの野郎ども』(1977)やヘブディジの『サブカルチャー』(1979)などに描かれている。⁽¹⁵⁾

小笠原は、ホールのこの「エイコーディング/ディコーディング」モデルはあまりにも単純な理念型として批判することは可能だとしながらも、文化の多層性や多種混濁性(hybridity)が主題化され、グローバリゼーションとローカリゼーションのせめぎ合いの中で複数文化間の「文化的翻訳」が、それらの「通訳不可能性」を含めて議論されている状況では、意味を生成し文化を生み出す「折衝」的实践の豊饒性を生産的に解釈していくことが肝要であろうと、評価している。そして、ホールの文化概念は、常なる「折衝」の言説空間と定義できるだろうとしている。⁽¹⁶⁾

以上、ホールの文化概念を中心に、カルチュラル・スタディーズにおける文化概念を見てきたが、このホールの文化概念にカルチュラル・スタディーズの文化概念を同一視し収斂させて

考えることは誤りであることはいうまでもない。なぜならば、カルチュラル・スタディーズは「一つではない」からであり、まさに文化の定義をめぐる論争それ自体が、カルチュラル・スタディーズの潮流を形成しているともいえる。

ただ、最大公約数的にいえることとしては、カルチュラル・スタディーズにそれ自体が、ポスト・コロニアリズムの状況やマイノリティの異議申し立てを背景にして、サブカルチャーや対抗文化へのコミットメントとして形成してきたことを考えれば、カルチュラル・スタディーズが「高級文化／低級文化」といった二元論や「メインカルチャー／サブカルチャー」といた序列を拒絶していることは明確である。また、文化を固定的で閉じたシステムのような平衡状態(stasis)において捉えようともしていない。カルチュラル・スタディーズは、文化を創発的でダイナミックで継続的に更新されるものとみなしている。文化をプロセスとしてとらえるのである。

2 社会学からの批判～ロバートソンの論点

カルチュラル・スタディーズの文化の捉え方やその潮流に対して、社会学の側からする「批判」がないわけではない。ここでは、ローランド・ロバートソンの批判を検討してみたい。

(1) 文化をめぐる論点

ロバートソンは、その著『グローバリゼーション』のなかで、カルチュラル・スタディーズの研究潮流を一定評価しつつもいくつかの問題点・限界点を提示している。

彼によると、文化への今日の関心は、社会的^{リフレキシビリティ}の増大の現れであるとされる。成熟した近代性は、文化への関心に後ろ向きであるが、脱近代性ないしは脱近代主義と呼ばれる領域においては、文化への関心を推進する可能性が多い。このポストモダンという範疇を射程にいれるとき、われわれ社会学者は、もっと再帰的であるべきであると主張する。

そこで、ロバートソンは、文化をめぐる基本的論点を五点にわたって整理している。第一に、今日、社会的な関心としての文化の可能性あるいは将来性に疑念が表明されている際、概念を正確に指摘すること。第二に、現在、文化への強い関心を推進している諸条件を考察すること。第三に、社会学それ自体における文化概念の系譜をたどり、これらの系譜を其他諸々の学問分野における従来および今日の展開と比較すること。第四に、これらの考察から学び取られる教訓を解析する努力を行い、文化が中心であることに十分敏感で、そのことを強調する社会学こそが必要であるという主張を表明すること（ことに文化に専門特化した社会的関心はむしろ不必要である）。そして最後に、「文化」をグローバルな場に適用すること。⁽¹⁹⁾

また、近年、社会学者およびカルチュラル・スタディーズの分野の人々によって多くの文化の定義が作り出されていることは、文化「そのもの」以上に、「文化の問題」を論じる必要が

あることを示しているとしている。⁽²⁰⁾

こうした潮流の中で、文化へのアプローチを整理すると、社会学者に代表される「分析家たち analysts」は分析的・解的な目的で文化の概念に関わってきており、一方で、カルチュラル・スタディーズに代表される「批判家たち critics」は診断的・実践的な理由のために文化への興味を示してきたという、二つの用法（二つの入り口）が見て取れるという。

(2) カルチュラル・スタディーズの研究傾向と問題点

ロバートソンは、カルチュラル・スタディーズにおいていま起きていることは、その視点に限界があることは認められるものの、軽視できない領域であるとする。

その理由として次の二つの事実がカルチュラル・スタディーズの試みにあるとしている。すなわち、カルチュラル・スタディーズは、その表現のいくつかにおいて社会科学者の側の文化への無関心ないし不十分な取り組みとみなされるものに対して激しい挑戦を試みているということであり、また、より根本的に社会学およびその他の社会科学の一般的論旨の多くを拒絶する傾向を帯びているという事実があるということである。ホールは、社会科学批判の重みと社会科学にとって代わろうあるいは超えようとする「強力なプログラム」をもっているし、イデオロギーと政治の公的局面と学問の局面の双方に「介入」することへの熱意、ないし知的分析の政治化への重いこだわりがあるとされる。⁽²¹⁾

そこにおいて、カルチュラル・スタディーズは、「文化」を二つの重要な、相互に交叉する形態で表現しているとする。ある一面でカルチュラル・スタディーズは、象徴表現、テキスト、レトリック、言説その他に焦点を置く縮小的（「テキスト主義的」）な傾向があるとし、しかし一面では文化の観念を、事実上、人間生活のあらゆる相を含むものとして用いる膨脹的（「文化はすべての」）な傾向があるとする。文化とは「個々固有の歴史的社会的諸々の慣習、言語、習俗の現実に根づいている領域」(S. Hall)である。この二つの面で文化的なものをとらえる。⁽²²⁾

よって、カルチュラル・スタディーズの文化を捉える視点の特徴としては、「抗議表現空間 representational space」拡大へのコミットメントがその基盤にあり、女性、同性愛者、「土着の native」人々、軽視されてきた人種的・民族的集団、被差別階級や地位集団などの「抗議表現 representation」としての文化という考え方が強力であるとされる。こうした展開の多くが、「他者」認知への関心、^{ディアスポラ}国外離散者の移住と増殖、^{ポストコロニアリズム}脱植民主義、アイデンティティの形成などといったグローバルな場の議論に強い関連を持っているとされる。⁽²³⁾

ロバートソンは、確かに、カルチュラル・スタディーズは現代における文化への取り組みとその用い方を豊かにしたことは評価できるが、抗議表現としての文化への関心の流動性・拡散性・反規律性(fluidity, expansiveness, anti-disciplinarity)が、とりわけ言説の論議を社会文化的存在の解釈や分析において優先的な地位に高めたために、カルチュラル・スタディーズを人間生活の他の局面と融合してしまう傾向があり、また、文化を特定のイデオロギーの定式書(agenda)

に沿って操作する傾向があり、さらには、構造的偶有性(structural contingency)および制度的「現実」(institutional 'reality')の論点に取り組むことを避ける傾向があるとして、その研究潮流に対しては警鐘を鳴らしている⁽²⁴⁾。

3 カルチュラル・スタディーズの可能性

(1) 社会学とカルチュラル・スタディーズ

これまで、反ディシプリンのカルチュラル・スタディーズの研究領域と、それへの社会学からの反批判としてのロバートソンの論点を概観してきた。

確かに、ロバートソンの言うように、カルチュラル・スタディーズの論調の中には、文化の概念に対する捉え方に、あいまいさがあることは否めないのは事実であろう。したがって、ひとつの理論体系なるものを構築しえないという限界性を持っているとの指摘も的を得ていると言えよう。また、カルチュラル・スタディーズがある文化現象を分析した、ある方法を安易に他の対象に適応して、「～のカルチュラル・スタディーズ」として提示することも可能であり、無数の研究が発表されていることも事実である。

しかし、カルチュラル・スタディーズは、継続的・論争的な問いの実践であり、したがって文化の定義自体を問題化するのであるから、ある脈絡において文化が問い返される場合、その文化を境界づけているコンテクスト性、その場に働く力、その場で表現される形態のすべてが同時に問題化されることになる。ある脈絡において文化を問い返すという営み自体が、文化の境界線をひきなおす営みでもある。文化の境界線をひきなおす営みは、カルチュラル・スタディーズ自体の境界線をひきなおすことへとつながる。カルチュラル・スタディーズは、その考え方の根底に常に刷新されるべき定義を含みこんでいるのである。

であるとするならば、ロバートソンの批判する観点は、既成のディシプリンからの批判としては有効性を持っているものの、カルチュラル・スタディーズの立場から、そうした論点自体を批判しているのであるから、殊これらの批判点に関してはすれ違うことになるとも言えよう。

しかし、一方で、カルチュラル・スタディーズの側からすると、「社会学」は「カルチュラル・スタディーズがそこから発展（あるいは反発）してきた学問の一つ⁽²⁵⁾」であるとみなしている。また、ターナーは、デヴィッド・モーリーの言葉を引用しながら次のようにも述べる。社会学は、カルチュラル・スタディーズが「テキスト化する」こと、つまり「分析される文化現象が、その社会的、物質的基礎からまったく解放されて、漂流してしまう」ことに歯止めをかける役割をになっている⁽²⁶⁾、と。しかし、カルチュラル・スタディーズと社会学の違いがなくなることはない。両者では、文化やイデオロギーのモデルが異なるからである⁽²⁷⁾。

それでは、社会学とカルチュラル・スタディーズとの接合点は見出せないであろうか。次節では、文化概念をめぐって両者の布置を大雑把であるが素描してみよう。

(2) 大文字の文化と小文字の文化

先に見たように、スチュアート・ホールは、「エンコーディング／ディコーディング」モデルのなかで、第三の「折衝」コードを提示したのであるが、ここにおいて人々は、「常識」という支配的な意味の表象としての大文字の文化(Culture)の内部に、それに対する自らの接近可能性に基づいている小文字の諸文化(cultures)を階層化しているとされる。

これまで社会学理論においては、パーソンズに代表的されるマクロな社会学理論に対しては、シュッツの現象学的社会学に代表されるミクロな社会学理論が対立してきたという構図がある。そして、その統合を目指してきた学問的歴史もある。この「大文字の文化と小文字の諸文化」という、文化概念を捉えるときの視点はひとつのヒントを提示しているともいえるのではないだろうか考える。

つまり、パーソンズがその文化システム論のなかで捉えてきた一般行為理論における文化の位置付けは「大文字の文化」ともいべきものであり、規範や価値としてわれわれの行為を規定するものとして、その社会の構成員すべてにあたかも〈平等〉に配分されていると措定されている。それはその社会の「常識」と呼ばれるものと重なる部分は大きいといえるであろう。そこにおいては、対抗文化のような「小文字の諸文化」は、大文字の文化からの「逸脱」とみなされるか、あるいは下位文化として「大文字の文化」に「包摂」ないしは「従属」されて捉えられるかの傾向が強かったといえる。⁽²⁸⁾

一方、現象学的社会学では、あくまで個人の意識の流れに焦点が当てられ、そこから社会を照射するという立場をとる。したがって、行為は、原則的には個人の内部にある意識の流れに規定されることになる。しかし、現象学的社会学においても、個人意識を規定する「知識」なるものは、個人の外側にある社会的・文化的なものとの関わり、つまり「経験」によって、個人のなかにストックされ、それが個人の関連性(レリバンズ)構造を形成することになる。よって、現象学的社会学においては、この個人の意識を規定する関連性構造が、「小文字の諸文化」と近似的に捉えることもできよう。⁽²⁹⁾

ところで、カルチュラル・スタディーズの立場からすると、それが「小文字の諸文化」をその出発点としていることにおいて、後者の現象学的社会学との親近性が大きいといえよう。しかし、現象学的社会学においても「大文字の文化」は一定ニュートラルに前提とされている。また、「大文字の文化」のヘゲモニーの問題、「小文字の諸文化」とのあるいは「小文字の文化」間のせめぎ合いの場として文化を捉えようとする視点が欠如ないし不問にされているのに対して、カルチュラル・スタディーズはそこに「文化の政治学」を見ようとしている点が決定的に異なるといえる。

スチュアート・ホールが示唆した「大文字の文化と小文字の諸文化」という図式は、今日の文化状況⁽³⁰⁾を理論的に考える場合、有力な観点を与えているといえる。

おわりに

本稿では、カルチュラル・スタディーズにおける〈文化〉概念について、その起点とされるウィリアムズにはじまり、主要な論客であるホルの「折衝」コードを手がかりに「大文字の文化と小文字の諸文化」がせめぎ合う場としての〈文化〉の概念図式へと辿り着いた。これは、トンプソンの分類に従えば、「文脈的」な文化概念の段階に位置づくことになる。彼の文化分類を文化理論の発展の段階とするならば、文化分析は、この新しいステップへと進むことが要請されていることにもなる。

既存の社会学に代表される文化の理論は、支配文化を国民国家＝全体社会の枠組みに限定して構築されてきたものといえる。そもそも社会学なる学問領域が、近代社会の誕生を機に「近代市民社会の診断の学」としてスタートしたとするならば、そこで俎上に載せてきた市民社会そのものが、いまや閉ざされたシステムとして完結しうるのはかを問わねばなるまい。グローバリゼーションのなかで「世界システム」や「グローバル・ヴィレッジ」を想定して見てもこの問いは消失しえないものである。問われているのは、支配文化は本当に閉ざされているのか、ということであり、「大文字の文化」の支配性が同質的な全体として捉えられるのかということだからである。

この難問を、安易な文化多元主義に陥ることなく超克することは至難のわざであるかもしれない。グローバリゼーションとローカリゼーションのせめぎ合う複雑性の海原にあって、その大波小波にあるときは揉まれ、またあるときは乗りつつ、(もちろん手持ちの道具をフル活用して)、そこから文化分析の理論を紡ぎ出して行くしか方法は見出せないのかもしれない。

注

- (1) Turner, G., [1996]
- (2) 'cultural studies' written by Michel Green in *A Dictionary of Cultural and Critical Theory*, edited by Michael Payne, Blackwell Publisher Ltd., 1996
- (3) Turner, [1996] p.11
- (4) リチャード・ホガート(Richard Hoggart)の著作としては、『読み書き能力の効用』(The Use of Literacy, 1958)がある。ホガートはこのなかで、イギリス労働者階級の言語、信念、価値観、家庭生活、ジェンダー関係と、儀礼、スポーツ・イベントやパブといった労働者階級のしきたり間の結びつきをたどり、それらの文化が、アメリカのポピュラー文化のイギリスへの浸透によって失われていった様子を記録している。なお、彼は最近のカルチュラル・スタディーズの動向については基準のない相対主義だとして、批判的であるといわれる。
- (5) レイモンド・ウィリアムズの『文化と社会』(Culture and Society, 1958)は、思想家たちの言説が、歴史的に「文化」の概念をどのように構成していったかを詳細に検討し、文化概念それ自体の社会的歴史的な構成に焦点を当てた著作であり、その後のカルチュラル・スタディーズに多大な影響を与えたとされる。他の著作に『田舎と都会』(1973)、『キーワード辞典』(1976)などがある。
- (6) Grossberg, L., Nelson, C., & Treichler, P., [1992] p.2
- (7) Williams, R., [1976(1980)] p.91-92(p.109-110)

- (8) Williams, [1958(1973)] p.xvi,259(p.4-6,242)
- (9) Williams, [1976]
- (10) Thompson, J. B., [1990] chap. III 'The Concept of culture' (p.122-162)
- (11) タイラーは、「文化とは、信仰、法律、芸術、政治、経済、その他の知識など、個人がある社会の一員として習得するすべての行為の集積体」と定義している。
- (12) Hall S., [1980]
- (13) 小笠原博毅, [1997] p.52-53
- (14) 同上, p.53
- (15) 同上, p.48
- (16) この機関誌に掲載された論文は、後に『儀礼を通じた反抗』(Hall & Jeffersonn, T.(ed.) *Resistance through Rituals: Youth Subculture in post-war Britain*, 1991 HarperCollinsAcademic)としてまとめられている。
- (17) 『サブカルチャー』においてヘブディジ(Dick Hebdige)は、ホールを引きながらも、モッズ、パンク、グリック・ロッカーズらの対抗文化が支配文化のヘゲモニーに(つまりは社会に)統合されるときに形態として、商品形態とイデオロギー形態の二つを挙げている。商品形態は、サブカルチャーの記号(衣服、音楽など)を大量生産されるものに変換してしまうことであり、一方、イデオロギー形態は、異常な行動に対して支配グループ(警察、マスコミ、司法など)の手で、「レッテル」を貼り再定義することである。後者に対してはさらに、バルトの言葉を引用して、(支配的)神話は「結局常に、自分に向けられた反抗に意味を与えることができる」と論じている。
- (18) 小笠原, 同前, p.54
- (19) Robertson, R., [1992(1997)] p.33(p.69)
- (20) *ibid.*, p.33(p.70)
- (21) *ibid.*, p.47(p.96)
- (22) *ibid.*, p.47(p.97)
- (23) *ibid.*, p.47-48(p.97)
- (24) *ibid.*, p.48(p.98)
- (25) Turner, 1996, p.175 (p.240)
- (26) *ibid.*, p.175(p.241)
- (27) *ibid.*, p.181(p.248-249)
- (28) タルコット・パーソンズの文化システム論については、『文化システム論』(丸山哲央訳, ミネルヴァ書房), 及び『社会体系論』(佐藤勉訳, 青木書店)を参照。また、拙論「システムとしての文化 — パーソンズにおける文化概念」(『佛大社会学』24号, 2000年3月発行, 佛教大学社会学研究会)を参照のこと。
- (29) 確かに、文化なるものを個人レベルに還元して適用することは行き過ぎの誇りを免れないかもしれない。これまでの文化理論においても、文化はある特定の集団を前提としてそこに見られる共通の、あるいは固有の行動様式などを指すとされてきたのだから。例えば、若者文化とか、京都文化とか、さらには、A中学校の文化とか。また、アルフレッド・シュッツの理論については、『社会的世界の意味構成』(佐藤嘉一訳, 木鐸社), 及び『アルフレッド・シュッツ著作集』(渡辺光・那須壽・西原和久訳, マルジュ社)を参照。
- (30) この文化をめぐる今日的状況とは、近年噴出してきているといえる。それを整理して論理的に論じることはここではできないが、いくつかを列挙するならば、ポスト冷戦に伴う民族紛争の問題、ポスト植民地主義に伴うディアスポラと文化的アイデンティティ、そのリプレゼンテーションをどう捉えるかという問題、またクレオール性をめぐる問題、グローバリゼーションとローカリゼーションのせめ

ぎ合いのなかで文化をどう捉え考えていくかといった問題等々、が考えられる。これらの問題の整理も緊急を要する課題であろう。

〔文献〕

- Grossberg, L., Nelson, C. & Treichler, P. (1992) "Cultural Studies: An Introduction" (C.ネルソン, P. トレクラ
ー, L. グロスバーク「カルチュラル・スタディーズとは何か」(『現代思想』1996. 3, 特集:カルチ
ュラル・スタディーズ, 青土社) in Grossberg, L., Nelson, C.& Treichler, P., ed. *Cultural Studies*,
Routledge, Chapman and Hall, Inc.
- Hall S., "encoding / decoding" in Hall, Hobson, D., Lowe, A. & Willis, P. (eds) *Culture, Media, Language*.
Working Papers in Cultural Studies., Unwin Hyman, 1980.
- Hall, S., & Gay, P., ed. (1996) *Question of Cultural Identity*, Sage
- 花田達郎, 吉見俊哉, コリン・スパーク編 (1999)『カルチュラル・スタディーズとの対話』新曜社
- Hebdige, D. (1979) *Subculture: the meaning of style*, Routledge (D. ヘブディジ『サブカルチャー』未来社,
1986)
- Morly, L., & Chen, K. (1996) *Stuart Hall: Critical Dialpgues in Cultural Studies*, Routledge
- 太田好信(1996)「人類学／カルチュラルスタディーズ／ポストコロニアルモメント, あるいは新たな
節合の可能性に向けて」(『現代思想』1996. 3, 特集:カルチュラル・スタディーズ, 青土社)
- 小笠原博毅 (1997)「文化と文化を研究することの政治学 — ステュアート・ホールの問題設定」『思想』
No.873, 岩波書店,
- Thompson, John B. (1990) *Ideology and Modern Culture*, Stanford University Press, Sanford, California.
- Turner, G. (1996) *British Cultural Studies: An Introduction*, Routledg (グレாம்・ターナー『カルチュラル・
スタディーズ入門—理論と英国での発展』溝上由紀他訳, 1999, 作品社)
- Robertson, R. (1992) *Globalization: Social Theory and Global Culture*, Sage (R. ロバートソン『グローバルゼー
ション』東京大学出版会, 1997)
- Williams, R. (1958) *Culture and Society* (レイモンド・ウィリアムズ『文化と社会』ミネルヴァ書房, 1973)
——— (1976) *Keywords—A Vocabulary of Culture and Society* (レイモンド・ウィリアムズ『キーワード辞
典』晶文社, 1980)
- 『思想』(カルチュラル・スタディーズ) 1996.1. 岩波書店
- 『現代思想』(特集:カルチュラル・スタディーズ) 1998.3月臨時増刊, 青土社
- 『現代思想』(総特集:ステュアート・ホール) 1998.3月臨時増刊, 青土社

(ひらた たけし 社会学研究科社会学・社会福祉学専攻博士後期課程)

1999年10月15日受理